

# 高山寺蔵寛喜元年識語本新訳華嚴經の二字漢語のアクセントについて

榎 木 久 薫

## 一 はじめに

稿者は先に、「高山寺蔵寛喜元年識語本新訳華嚴經」の漢字声調について、「保延本法華経単字」（以下「法華経単字」と略称する）の反切によって知ることの出来る呉音單字声調と比較することによって、その性格について考察を加えた。その際、稿末に次のような推測を述べた。

本文献を經典の呉音字音直読文献としてみるならば、一音節去声字の上声化および上声字・去声字の後の二音節去声字の上声化が見られることから次のようなことが指摘できる。本文献の加点者は、殆どの場合、加点された漢字を何文字かのまとまりで（場合によっては一字で）、日本語としての語と捉えていたものと考えられる。

但し、先にも述べたように、ここで言う語の、日本語としての定着度には幅があったものと考えられる。恐らく、多くの語は臨時一語的なものであろう。臨時一語としての單字声調の連続が、日本語アクセントと齟齬を来さない限り、そのままの形で受け入れるのが基本であったと考えられる。しかし、一音節去声字の上声化および上声字・去声字に下接する二音節去声字の上声化以外にも声調変化の現象が見られる。このよう

な変化の内には、次のような場合も含まれるであろう。

臨時一語の、日本語アクセントとして不自然でない單字声調の連続も、語として熟合度が高まると更にアクセント変化を起す。このような現象は、和語にはしばしば認められることである。本文献の加点者が加点された漢字のまとまりを語と認識したとすれば、和語に生ずる現象が漢語においても生ずることは自然なことであろう。

本攷では、このような推測に対する答えを探る一つの試みとして、日本語の中の漢語として最も基本的な形である二字漢語に焦点をしばって、考察を加えることとした。

付言すれば、本文献の声点差声および字音仮名加点は、大半が漢字二字単位に対して行なわれている。この漢字二字が語の単位でない可能性もあり得る。しかし、上声および去声二音節字の後の字に去声点の差声が僅かの例外を除いて見られないことから、少なくともアクセント的には、一つのまとまりとして捉えられていたものと見なし得る。本稿では、このようなものも臨時一語的なものとして、二字漢語に含めて考察することとした。なお、二字以上の連続に声点差声が見られるものもあるが、どのまとまりを語とするか確定することが困難であるので、本攷では取り上げなかった。

本攷では、二字漢語に差声された声点を語アクセントとして捉

え、まずアクセントの型による整理を加えた。また、「法華経單字」の反切によって知ることの出来る吳音單字声調と比較を行ない、そのずれに基づいて、臨時一語的なアクセントから更にアクセントが変化する実態を明らかにすることを目指した。

## 二 アクセント型の類別と量的分布

本文献の二字漢語に対して声点が差声されたものを、音節数とアクセント型の違いによって類別し用例数を示したものが、以下の一覧である。

\*以下の、記号によるアクセント表示は、次の通りである

高音節 ●・低音節 ○・去声音節 ■ (語アクセントとしては●で現れる)

・入声韻尾音節 △ (入声軽においては高音節 ▲ となる)

三音節語については、漢字に対応する音節のまとまりを示した

\*数値は用例数 ( ) 内は明らかに漢音読と見なされる漢字を含む語の用例数 (内数) である

### 音節数別語アクセント型一覧

#### 2音節

低平

○ ○ 15 匪(平)ヒ懈(平)ケ 55・70

末高

○ ● 9 主(平)シユ稼(上)カ 1・157

頭高

● ○ 39 軌(上)クキ度(平)濁)ト 16・311

高平

● ● 34 暨(上)キ于(上)ウ 16・350

#### 3音節

低平

○ ○ ○ 85 溥(平)フ蔭(平)フム 25・218

○ ○ 一 ○ 26 (3) 羸(平)ルイ瘦(平)シユ 44・201

○ ○ 一 △ 20 普(平)フ治(入濁)カン 17・517

○ △ 一 ○ 11 若(入)ニヤク寤(平濁)コ 24・206

末高

○ 一 ○ ● 58 12 劬(平)ク勞(去)ラウ 59・126

○ ○ 一 ● 25 (2) 霑(平)テム灑(上)シヤ 18・327

○ △ 一 ● 21 頰(入)ケフ如(上)ニヨ 75・202

中高

○ ● 一 ○ 17 (1) 低(去)テイ下(平濁)ケ 77・174

平板

○ ● 一 ● 41 38 (1) 臨(去)リム馭(上濁)キヨ 28・C151

○ 一 ● ▲ 3 被(平)ヒ戮(入)ヒロク 25・233

頭高

● 一 ○ ○ 68 47 遲(上)チ緩(平)クワン 64・435

● 一 ○ △ 21 (1) 勇(上)ユ敵(入)チャク 3・116

末低

● ● 一 ○ 5 4 (2) 痊(上)セン瘡\*(平)ユ(「愈」ヲ見消テ訂正) 76・432

● ▲ 一 ○ 1 瑟(入)ヒシユツ吒(平)タ 76・387

高平

● ● 一 ● 17 15 不(上)フ瞬(上)シユン 76・282

● ● 一 ● 2 盛(墨)上濁)シヤウ伽(墨)上)キヤ 45・22

中低

● 一 ○ ● 3 偉(上)キ哉(去濁)サイ 16・173

低平

○ ○ ○ 140 48 (7) 儔(平)タウ伴(平濁)ハン 58・87

○ ○ ○ △ 56 (8) 辨(平濁)ヘン析(入)シヤク 62・323

○ △ ○ ○ 16 激(入)キヤク電(平濁)デン 66・342

○ △ ○ △ 20 (1) 測(入)シキ度(入)タク 54・360

末高	54	○	31	樂(平濁)ケウ揺(去)エウ	3・9
○	○	○	○	○	○
○	△	○	23	(3)擢(入)タク幹(去)カン	4・205
中高	108	○	57	(5)堅(去)ケン硬(平)カウ	10・253
○	○	○	50	(9)明(去)ミヤウ徹(入)テツ	1・75
○	○	○	1	渴(入)カツ仰(平)カウ	34・93
平板	30	○	26	(2)鑽(去)サン仰(上濁)キヤウ	17・493
○	○	○	4	(1)渾(去)コン濁(入)軽濁)チヨク	17・9
中低		○	1	精(去)シヤウ麗(去)レイ	25・50
○	○	○	11		
中末高		○	4	扣(薄墨朱平)コウ擊(薄墨朱入)キヤク	33・28
○	○	○	4	(2)上(平濁)号(入)軽)カク	48・148
○	○	○	2	骨(入)コツ髓(上濁)スイ	55・17
○	△	○	1	挾(入)ケフ闊(入)軽)カク	64・31
中末低	16	○	4	漂(上)ヘウ淪(平)リン	3・61
○	○	○	12	(2)漂(上)ヘウ溺(入)ニヤク	13・232
高平		○	2	闡(墨上)揚(墨上)ヤウ	33・245

右の一覧を、アクセント型毎の用例数の多い順に一〇位まで並べると次の様になる。

\*音節の高低のみでまとめ、次のような違いを区別しない

入声軽韻尾音節▲と高音節●、入声韻尾音節△と低音節○とを区別しない。また、三音節語の単字に対応する音節のまとまりの違いを区別しない。

①	4	音節低平	140
②	4	音節中高	108
③	3	音節低平	85
④	3	音節頭高	68
⑤	3	音節末高	58
⑥	4	音節末高	54
⑦	3	音節平板	41
⑧	2	音節頭高	39
⑨	2	音節高平	34
⑩	4	音節平板	30

高順位のアクセント型ほど本文献の二字漢語のアクセントとして多く見られる型である。用例数の多寡は、基本的には、二字漢語を構成する単字毎の声調の連続形の多寡が、反映しているものと考えられる。

しかし、前稿で考察したように、本文献の単字毎の声調と「法華經單字」声調とは不一致が見られる。その内には、本文献の加点者の理解する呉音單字声調と、「法華經單字」反切によって知ることの出来る呉音單字声調とが異なっていることによるものも含まれるであろう。

しかし更に、日本語としてのアクセント変化によって単字の声調とは違った声調となっているものも含まれるであろう。これらには、一音節去声字の上声化、上声及び二音節去声字の後の二音節去声字の上声化のように、日本語の語アクセントとして存在しないアクセント型を避けるための変化(第一次のアクセント変化)と、語の熟合によってアクセントが変化する第二次のアクセント変化とが含まれる。本稿で焦点を当てるのは、この内の、語の熟合によってアクセントが変化する第二次のアクセント変化である。

### 三 語アクセントと単字声調連続形との対照

ここでは、本文献の声点差声のある二字漢語で、「法華経單字」の反切によって単字の声調を知ることの出来る語について、「法華経單字」によって知ることの出来る單字声調の連続形と、本文献の声点差声に基づく漢語アクセントとを対照させて考察を加えることとする。なお、「法華経單字」との比較であるから、明らかに漢音読と見られる漢字を含む語は、以下の考察においては除かれる。

次の一覧は、これらの語を二つの観点から分類整理したものである。

#### 漢語アクセント↑単字声調連続

同じ漢語アクセントを持つ語をまとめ、それが単字の声調連続としてどのようなアクセントであるかを見たもの

#### 單字声調連続↓漢語アクセント

單字の声調連続として同じアクセントを持つものをまとめ、それが漢語としてどのようなアクセントであるかを見たもの

先にも述べたように、本文献の加点者の單字としての声調認識が、「法華経單字」の反切によって知ることの出来る單字声調とまったく同一であるか否かは明らかでない。よって、單字の声調連続形と漢語アクセントとの不一致が、すべてアクセント変化によるものであることは出来ない。以下の考察においては、このことを踏まえて、僅かな数値の差にとらわれず、大きな傾向を捉えらることに主眼を置く。

\*数値は用例数、%は一致率である。一致率の算出においては、第一次のアクセント変化に関わる不一致例は、不一致として扱わず一致するものとして扱った

#### 漢語アクセント↑単字声調連続

#### 2音節

低平	7	100%	嬉(平)キ戯(平)ケ	59・90
末高	2	50%	叵(平)ハ思(上)シ	3・163
頭高	14	85.7%	又(平)シヤ迦(上)カ	3・77
●	↑	0	無(上)ム怙(平)ロ	13・228
●	↑	0	鬼(上)クキ魅(平)ミ	76・430
●	↑	0	2	
高平	7	71.4%	婆(上)ハ稚(上)チ	3・252
●	↑	0	5	
●	↑	0	野(墨)上ヤ姿(墨)上サ	45・56
●	↑	0	2	
3音節				
低平	33	72.7%	以(平)イ瞻(平)セム	21・155
○	○	○	面(平)メン皺(平)シ	21・81
○	○	○	快(平)クエ樂(入)ラク	3・324
○	△	○	悦(平)エツ豫(平)ヨ	25・152
○	○	○	耳(平)ニ璫(平)タク	64・61
○	○	○	迅(平)シン流(平)ル	1・163
○	○	○	連(平)レン膚(平)フ	27・8
○	○	△	質*(墨)朱(平)ム易(墨)朱(入)ヤク(擦消)上	78・197
末高	20	55%		
○	△	○	跋(入)瀾(ハ)ッ那(上)ナ	12・91
○	○	○	劬(平)ク勞(去)ラウ	59・26
○	○	○	3	
○	○	○	險(平)ケム易(上)イ	34・467
○	○	○	珊(平)サン瑚(上)コ	34・341
○	△	○	足(入)ソク(上)ソ	48・376
○	○	○	連(平)レン膚(上)フ	25・234
○	○	○	咽(平)エン*咀(上)ン(「上」某字ニ重書)	25・273



末高 3 33.3%

○●↓○● 1 回(平)ハ思(上)シ 3・163

○●↓○● 2 摩(上)マ醜(上)△ツキエ 22・165

頭高 12 100%

■○↓○● 12 依(上)エ怙(平)ロ 71・26

高平 6 83.3%

■●↓○● 5 婆(墨上濁)ハ訶(墨上カ) 45・24

■●↓○● 1 又(平)シヤ迦(上)カ 3・77

3音節

低平 34 70.6%

○●↓○● 5 徐(平濁)シヨ轉(平)モテン 62・102

○●↓○● 9 健(平濁)コン臂(平)モ 3・115

○●↓○● 4 怯(上)カフ怖(平)ン 16・228

○●↓○● 6 聚(平濁)シユ沫(上)マツ 59・390

○●↓○● 2 埴(平)ツイ阜(上)ン 74・137

○●↓○● 1 匱(墨朱平上カ)キ(墨朱入輕濁)ホツ 78・180

○●↓○● 2 滋(上)シ榮(平)キヤウ 3・14

○●↓○● 1 瑟(入輕)シユツ吒(平)タ 76・387

○●↓○● 4 吉(入)キツ凶(上)ツ 76・436

末高 19 57.9%

○●↓○● 3 垢(平)ク繪(去濁)ンウ 25・219

○●↓○● 3 苫(平)セム婆(上濁)ハ 45・393

○●↓○● 5 密(入)ミチ緻(上)チ 48・6

○●↓○● 4 已(平)イ踐(平)セン 1・81

○●↓○● 1 迅(平)シン流(平)ル 1・163

○●↓○● 2 諦(墨去)テイ羅(墨上)ヲ 45・49

△●↓○● 1 薄(墨上濁)ハ底(墨去)テ 45・24

中高 7 57.1%

○●↓○● 4 磬(去)キヤウ捨(平)シヤ 27・429

○●↓○● 1 連(平)レン膚(平)ン 27・8

○●↓○● 1 連(平)レン膚(上)ン 25・234

○●↓○● 1 牢(上)ラウ固(平)ロ 45・125

平板 5 60%

○●↓○● 3 療(去)レウ治(上濁)チ 36・B240

○●↓○● 1 咽(平)エン\*咀(上)ン(「上」某字ニ重書) 25・273

○●↓○● 1 紺(去)コム蒲\*(平)(某字ニ重書) 48・176

頭高 14 92.9%

■○↓○● 8 癡(上)チ闇(平)アム 46・114

■○↓○● 5 雨(上)ウ滴(上)チヤク 13・335

■○↓○● 1 賀\*(墨朱平)ム易(墨朱)入(擦消)上) 78・197

■○↓○● 3 裸\*(上)ラ形(上濁)キヤウ

■○↓○● 3 戸(上)コ牖(平)ヨウ 76・103

4音節

低平 49 87.8%

○●↓○● 19 續(平)ビン紛(平)ン 39・7

○●↓○● 10 蔽(平)ヘイ日(入)ニチ 1・154

○●↓○● 7 迫(入)ハク隘(平)アイ 7・500

○●↓○● 7 逼(入)ヒツ迫(入)ハク 25・154

○●↓○● 1 諷(去)フウ詠(平)キヤウ 75・224

○●↓○● 2 纏(去濁)テン迫(上)ハク 16・439

○●↓○● 1 渴(入)カツ仰(平)整(去)ウツ 34・93

○●↓○● 2 骨(入)コツ髓(上濁)スイ 25・235

末高 12 66.7%

○●↓○● 3 隱(平)ヨン莖(去)キヤウ 59・276

○●↓○● 1 稠(平)チウ林(去)リム 71・43

○●↓○● 4 錯(入)シヤク謬(去)メウ 45・25

○△○○●	↓○○○○○	1	寶(平)ホウ瑠(平)タウ	24・53
○○○●	↓○○●●	2	嫌(去)ケム恨(ト)ロン	57・37
○○○●	↓●●●●	1	闡(墨)上揚(墨)上ヤウ	33・245
中高 32 62.5%				
○○○●	↓○○○○○	10	勞(去)ラウ倦(平)クエン	30・159
○○○△	↓○○○○△	10	門(平)モン闢(入)邁タツ	22・40
○○○●	↓○○○○○	1	煙(墨)平エン焰(墨)平エム	62・404
○○○●	↓○○○○○	1	門(墨)入蔽(墨)平ハイ	4・178
○○○△	↓○○○○△	5	門(平)墨朱平闢(平)墨朱入タツ	33・18
○○○●	↓○○○○○	1	剛(上)剛カウ齋(平)サイ	1・70
○○○△	↓●●○○△	4	爪(上)サウ甲(入)カフ	27・368
中低 8 62.5%				
○○○●	↓○○○○●	5	群(去)邁クン萌(上)マウ	24・273
○○○●	↓○○○○●	1	叢(平)ソク林(去)リン	59・164
○○○●	↓○○○○○	2	超(去)邁(平)マイ	12・139

以上の一覧をまとめたものが、後の表である。ここで、先に類別した、用例数第一位の四音節低平アクセントの語について見ると、漢語アクセントの側から見た一致率が82.7%、単字声調連続形の側から見た一致率は87.8%である。これは、本文献の漢語アクセントとして四音節低平型である語は、82.7%が単字声調連続形としても四音節低平型であり、単字声調連続形として他のアクセント型であって、漢語アクセントとして四音節低平型であるものは17.3%であることを示す。また、単字声調連続形として四音節低平型である語は、その87.8%が漢語アクセントとしても同じ型であり、漢語アクセントとして他のアクセント型であるものは12.2%であることを示す。これは、他のアクセント型の一致率と比較するならば、全体として高率であり、四音節低平型は語の熟合によるアクセント変化の少ないアクセント型と言うことが出来る。

る。恐らくこれは、このアクセント型が臨時一語的なアクセント型としてポピュラーな型であったことを示すものである。

次に、用例数第二位の四音節中高アクセントの語について見ると、漢語アクセントの側から見た一致率が76.9%、単字声調連続形の側から見た一致率は62.5%である。これは、四音節低平アクセントの語に比べて、低い一致率である。漢語アクセントの側から言えば、このアクセント型の語は、四音節低平型の語に比べて比率として、他のアクセント型からこのアクセント型に変化したものが多いと言うことになる。しかし、単字声調連続形の側から見た一致率は更に低い。これは、単字声調連続形として四音節中高アクセントである語は、他のアクセント型から漢語アクセントとして四音節中高型になるより多く、漢語アクセントとして他のアクセント型に変つていることを示すものと考えられる。つまり、このアクセント型は語の熟合によるアクセント変化においては避けられる傾向になるアクセント型と推測される。

このように、漢語アクセント型毎の用例数の多寡と、第二次のアクセント変化(語の熟合によるアクセント変化)において指向されるか避けられるかは必ずしも一致しないと言える。

このような観点から、各アクセント型について見ると、用例数が僅かであったり、一致率の差が僅かであるものを除いて、次のように整理出来る。

避けられる傾向にあるアクセント型

二音節低平○○○ 三音節中高○○○ 四音節末高○○○●

四音節中高○○●○○●○○●

指向される傾向にあるアクセント型

二音節頭高●○○ 二音節高平●●● 三音節頭高●○○○

このように整理すると、避けられる傾向にあるアクセント型と指向される傾向にあるアクセント型とで、第一音節の高低が対立していることが指摘できる。指向される傾向になるアクセント型

アクセント型	漢語	用例数	一致率	単字連続	用例数	一致率
2音節						
低平	○○	7	100%	○○	9	77.8%
末高	○●	2	50%	○●	3	33.3%
頭高	●○	14	85.7%	●○	12	100%
高平	●●	7	71.4%	●●	6	83.3%
3音節						
低平	○○○	33	72.7%	○○○	34	70.6%
末高	○○●	20	55%	○○●	19	57.9%
中高	○●○	5	80%	○●○	7	57.1%
平板	○●●	7	57.1%	○●●	5	60%
頭高	●○○	18	72.2%	●○○	14	92.9%
末低	●●○	2	0%			
高平	●●●	3	100%			
中低	●○●	1	0%	●○●	6	50%
4音節						
低平	○○○○	52	82.7%	○○○○	49	87.8%
末高	○○○●	9	88.9%	○○○●	12	66.7%
中高	○○○●	26	76.9%	○○○●	32	62.5%
平板	○○●●	7	71.4%	○○●●	8	62.5%
中低						
中末高	○○●●	2	0%	○○●●		
中末低	●○○○	5	0%			
高平	●●●●	1	0%			

に共通する第一音節の高は、単字の声調としては、一音節去声字が上声化した場合だけである。つまり、第一音節が高であるアクセント型は、単字声調連続形としてのアクセントでは劣勢な型と

いうことになる。このようなアクセント型が指向される傾向にあるということは、語の熟合によるアクセント変化においては、より漢語アクセントらしくない型に変化する傾向にあったというこ



とになるう。

また、単字声調連続形としては存在しない、三音節末低●●○  
 ・四音節中末高○○●●・四音節中末低●●○○・四音節高平●●  
 ●●●●は、四音節中末高を除いて、いずれも第一音節が高である。これらは、単字としては、語頭二音節上声字か、入声軽の声点差声字である。これらのアクセント型が出現するのも、語の熟合によるアクセント変化における、より漢語アクセントらしくない型への変化として捉えらえることが出来るよう。

次に指摘できることは、三音節末高○○●●・三音節平板○○●●のアクセント型の語は、漢語アクセントの側から見た一致率も、単字声調連続形の側から見た一致率も低率であることである。これは、単字声調連続形としてこれらのアクセント型であった語の多くが、他のアクセント型に変化する一方で、単字声調連続形として他のアクセント型であった語も、多くこれらのアクセント型に変化しているということである。その理由は、現時点で明らかにすることが出来ないが、先に述べた四音節低平型アクセントの語との対比で言うと、次のようなことが考えられる。

どちらの側から見た一致率も高率である四音節低平型アクセントが、臨時一語的な漢語アクセントとしてピュラーな型であったとするならば、これらのアクセント型は、より熟合度の高い語のアクセント型であった可能性がある。このことは、語としては臨時一語的なものでありながら、単字声調連続のアクセントがこれらの型であった場合、かえって避けられることになるであろう。

#### 四 まとめ

以上、本文献の声点差声のある二字漢語で、「法華経単字」の反切によって単字の声調を知ることの出来る語について、単字声調の連続形と、本文献の声点差声に基づく漢語アクセントとを対

照させて、一致率と言う観点から考察を行なった。

但し、以上で述べたことは、傾向として指摘できることであつて、絶対的な変化ではない。殆どのアクセント型においては、避ける傾向にあると言えるアクセント型であっても、他のアクセント型からそのアクセント型に変化した語があり、また、指向する傾向にあるとも言えるアクセント型であっても、他のアクセント型に変化した語もあるのである。第二次のアクセント変化は、第一次のアクセント変化のような規則的・体系的な変化ではなく、語の熟合度によって生じるか否かが異なり、また恐らくは、語の意味や音形に基づく類推によって、同一のアクセント型の語が異なるアクセント型に変化すると言う、個別的な変化であつたということである。

#### 注

(1) 拙稿「高山寺藏寛喜元年識語本新訳華嚴經の漢字声調について―保延本法華経単字との比較―」(鳥取大学教育地域科学部紀要 教育・人文科学 第四巻 第二号 平成十五年一月)

また、本文献についての基礎的な整理の報告、加點字の分韻表の形で報告、及び漢音系字音の混入についての考察に、次の諸拙稿がある。

「高山寺藏寛喜元年識語本新訳華嚴經をめぐって」(鎌倉時代語研究 第十九輯 平成八年八月)

「高山寺藏寛喜元年識語本新訳華嚴經加點字翻刻並びに分韻表」

(鎌倉時代語研究 第二十一輯 平成十年五月)

「字音直読資料としての高山寺藏寛喜元年識語本新訳華嚴經―漢音系字音の混入について―」(鎌倉時代語研究 第二十三輯

平成十二年十月)

〔付記〕本稿を成すに当たり、文献の閲覧・調査に関して、高山寺小川千恵御住職を初めとする高山寺御当局の方々の御高配を賜った。また、築島裕先生・小林芳規先生を初めとする高山寺典籍文書総合調査団の方々には、様々のお導きを頂いた。記して深謝申し上げる次第である。